

1924年 (大正13年) [20歳]

「辰雄日誌1924」No. 4 (5)

— 1924年5月1日～31日 —

小池辰雄

○1924年5月13日 (火)

晴。今日は5月13日である。天気は晴朗である。僕の心は如何である。未だしである。信仰の炎は至つて微弱である。筆を執るの勇氣を有しない慚汗背を潤すである。罪の黒魂。塵の塵、芥の芥。物の数にもあらぬ虫けらが僕である。何故に然るか。不信の心。ただこれのみによりて然りである。迷える心。ただこれのみが総ての禍を醸す。

真理に向かつて直進。徹底的の献身。神への絶対的信頼。ただこれのみによりて救わる。救の道はただ之あるのみ。而して他に一つもあるなし。

辰雄よ、あわれなる辰雄よ。全く迷いの道に彷徨せる危うき辰雄よ。汝は10日間、試み給えと云いて試みを受け、汝はサタンに徹底的に勝つ能わざりき。汝は、ある時はサタンに勝てり、然れども汝は危うきものなり。汝の勝利は確実ならざりき。汝の礎は、千代経し磐の上には立てられては在らざりき。危うき勝利に驕らんか、危険これより甚だしきは無しである。

ああ、酔える人なるかな。罪と慾とに酔える人なるかな。何故に「神に酔える人」とならざるか。神の人よと云わるるにあらずや。辰雄よ、しっかりしろよ。

汝の人生の、汝の生涯の、今は、一大重要時機なり。汝の過去を顧みよ。汝の生まれて小学生となるまでの幼年時代を顧みよ。汝の小学生時代を顧みよ。汝の中学時代を顧みよ。而して汝のこの2、3年を思え。汝、今、齡正に20に満つ。

汝の生まれかわるべき時は正に今日なり。汝の霊の聖霊を迎え奉るべきは今である。今にして汝、霊的に甦らずんば遂に救われざらんとす。

神よ来り給え。聖霊宿り給え。

さて、汝の日常のことを考え見よ。日常の生活が神に導かるる信仰の生活に非ずしては、遂に信仰も何かあらん。汝の知も何かあらん。汝の聖書も宗教書も悉く死なり。

汝は今日第一に母上に対して孝ならざるべからず。敬いて忠実に仕え奉らざるべからず。母上の鴻恩は如何ばかりなるぞ。これをジット思うとき、汝は如何に母上につかえざるべからざるかを思えよ。

次に汝は新しき姉上に従してやはり、敬ならざるべからず。彼女の気は誠に弱し。故になおさら驕りの心はあるべからざるなり。姉に干渉がましきこと毫も言うべからずである。次に壽子さんについて絶対に口をきかざることありとす。要するに汝が汝の本領に帰る



べきことなり。かかる瑣々たることを書くこの我を今思うとき、なきけなくて涙が零れる。汝は神の在るときに誠に偉大な人間である。キリスト我れに在り、我れキリストに在るときに如何に汝は偉なることよ。その汝の偉、之即ちキリストの偉なればなり。然るに見よ、一旦、汝キリストを離れてサタンに弄せらるるところとならんか。汝の醜態、たとえんにもものなしである。

汝は食にとらわれたる食の囚人なり。食の奴隷なり。汝が慾にひかれて物を貪るとき、5、6才の幼児よりあわれなるものなるをおぼゆ。彼等は食欲とどまらば「不要」なるを告げて更に食せざるに、汝は美味なるものとあれば腹に相談する余裕すらなく慾にまぎらされて、コントロールを失つて貪る。ああ、「貪る勿れ」とは汝が幾度ききし声なるや。

神は救い給う。必ず救い給う。雄々しかれ、信仰の戦を戦え。

主よ。最早、我、何も誓うことをせじ。ただ主に任せてのみ歩まん。主は幾度、我が手を採り給いて救わんとし給いしぞ。

而して、我は幾度聖手を自らはなして主より遠ざかりしことぞ。そして罪に、サタンにくみしし事ぞ。そしてサタンに別れては主を慕いまつり、主にすがらんとせしぞ。そして主は、やさしくも聖手を伸ばし給いて救わんとし給えり。我聖手にすがりて完全に救われんとするやまた聖手より自らはれしこと幾度なりしぞ。かくすること誠に幾度なりしぞ。信仰薄弱なるこの辰雄をゆるし給え。

神よ。信仰なる、真剣なる、謹慎なる、真勇なる、沈着なる、快活なる、歓喜なる、感謝なる、讚美なる、祈祷なる、よき日々を送らしめ給え。

この10日間は天候定まらず、風は概して強く、塵芥は街路に吹き巻くられ、心地よき日としては一日もあらずと云つてよかつた。雨もしばしば降つた。気温も一定しない。5月4日には晩に実さんの大学卒業兼大蔵省就職の御祝いの宴が開かれた。母上あいにく御腹が悪くて僕が代理に戴いた。4日、5日は菖蒲湯に入りに行つた。5日の夜には駒込基督教会の中央線組の組合が家うちで開かれた。来会者12、13名であつた。初めてかかる催しをやつたわけである。富永先生も来られた。11日の日曜には母上をお伴れして教会へ行つた。

10日の午後、宇都宮の兄上が陸軍大学の試験を済ませて帰つて来られた。午前で済んだわけである。随分大変な試験であつた。御同情申し上げた。11日の夕方帰宇。明12日から早速御出勤。なおさら御身体のために祈る。休息なんて言つて居られぬのである。それに付けても僕は丈夫にならねばならぬ。

5月12日、昨日午後から細雨の中を母上様と山本へ行つた。一晩お宿りをして僕は今日午前帰つて来た。明日、母上をお迎えに行く。今朝の心地のよかつたこと。やはり田舎である。郊外である。空気の味が違う。朝食後、義雄さん、隆さんを伴れて1時間ほど散歩をした。

医薬を用うることは余り好ましくないことであるが、胃腸アトニー症なる以上その補助



をも幾分要することであるから、母上様、南先生に従って医薬を用うことにした。用うる以上はその薬をして最も効果あらしむる様に食事をせねばならぬ。一昨年の腸疾患のあとの養生が不徹底であったため今日のこの身体になったのであるから、この度は真剣に、慎重に、徹底的に退治しなければならぬのである。神は必ず新しき健全なる身体を賜うと信ずる。新しき健全なる身体は甦りの健全なる精神が僕に宿ると共に来る。このことは実に実に明らかである。大真理である。真理と見たら、驀進する。直進する。健全なる精神は健全なる身体に宿る。学生の本分に立ち帰り神の聖旨に従って日々を送らば必ず、我が身体は新しき健全なるものとなるのである。よし1学期休むとも、よし1年おくれるとも、そんなことは問題でない。

汝の靈魂の徹底的の救、汝の身体の生まれ更わり、これをしも得れば、神の御仕事はそれからいくらでも出来る。かくてこそ真の奉仕である。

ここに日課を定めて、そのもとに着々と歩むべき道を歩まんとするのである。

日々のつとめ。My Golden Rule. [私の貴重な習慣]

読書と語学。母上に読書。自彊術と静坐。汝貪る勿れ。

Fasset eure Seelen mit Geduld. [汝らは忍耐によりて其の靈魂を得べし]

Mens sana in corpore sano. [健全な精神は健全な身体に宿る]

A.M.6:30 起床、Prayer [祈り]、冷水摩擦。Holy Hour [聖なる時]、詩篇、箴言、詩。

A.M.7:30 ～ 8:00 朝食、Prayer。静かに適度に節食。母上に新聞を読んで差し上げること。

A.M.10:00 ～ 11:30 散歩、運動、又は読書。

P.M.0:00 ～ 0:30 昼食、Prayer。静かに、適度に、節食。読書。

P.M.2:00 ～ 5:00 散歩、運動。

P.M.5:30 ～ 6:30 夕食、Prayer。静かに、適度に、節食。入浴隔日。

P.M.7:00 ～ 8:00 英書。

P.M.8:00 ～ 9:00 聖書、宗教書。Holy Hour。

P.M.9:00 ～ 9:30 日記。

P.M.10:00 Prayer、就寝。

○1924年5月14日 (水)

晴。今晚、耳下腺が急に腫れ出したので、ほうさん あんぼう 硼酸の罨法をして寝た。

○1924年5月15日 (木)

晴。大学病院へ行った。三弦さんに見て戴いた。一寸、中耳炎かと思ったが、やはり耳下腺炎でよかった。腫れは次第に増してきた。



○1924年5月16日(金)

曇。あんぼう 罨法あんぼうをしているけれども(エントー水) 団々腫れて来た。所謂おたふく風邪である。

○1924年5月17日(土)

雨。天候が一定しない。不順である。氷枕をあてた。氷嚢で冷やした。咽喉も少々いたくなつた。ものが嚙めなくなつた。半流動食をしている。食欲はさほど減退しない。熱は8度6分に達した。

○1924年5月18日(日)

晴。依然として氷嚢と氷枕。女中に夜中に時々起きて替えてもらう。彼女に気の毒である。

○1924年5月19日(月)

雨。氣候不順で母上のお腹も定まらない。お粥や卵やウドンやスイトン、じゃがいもの様なものを食べている。熱が少しひいて来た。食欲のあるのは感謝である。

○1924年5月20日(火)

曇。風はこの頃の常。耳下腺よりも顎下腺の方が腫れて来た。四郎君が見舞に來られた。

○1924年5月21日(水)

晴。ほぼ癒つて、今日は氷をとつた。実さんが來られた。

○1924年5月22日(木)

晴。お花を兄上の靈前にお供えた。武田の叔母様からお見舞に戴いたカステラをお供えた。尾田先生の欧州からのお土産のパインアップルの缶詰もお供えた。土、日曜には宇都宮の兄上が帰つて來られた。平口様が御親切に色々お手伝いして下さい。

○1924年5月23日(金)

雨。猛烈に雨が降つた。男性的で氣持がよかった。

○1924年5月24日(土)

晴。朝は一寸寒い。食欲旺盛である。殊に御飯が美味しい。ジャガイモとたいみそが美味い。罨法あんぼうをとりはずして、せいせいした。こぶがとれたように感じた。咽喉もほぼなおつた。吸入もやめた。病中、山室軍平大佐の『病床の慰安』を読んで、得るところあり感謝であつた。バンヤンの『天路歷程』を読もうと思つてゐる。英詩を読む心の淨き、詩人と共に神

を思い天然を思う。テニソンよ、ウォーズウォースよ、ホイットマンよ、ホイッチャーよ。

○1924年5月25日 (日)

晴、驟雨あり。母上と駒込教会へ行く。お昼、青木へ行く。4時半頃、帰途につく。三弦さん、四郎ちゃん、泰ちゃんと4人でプラスマイナスをする。9回戦、泰ちゃんと36対35、非常なクロースゲームをした。面白かった。大きい二人はマイナスであった。お菓子を出されたが、晩御飯を美味しく食べたためにはと思つて、ひかえて置いた。

帰つて来て、大工仕事を一つやった。棚を作った。夕飯は、エンドー豆の御飯、生まれ初めて初めてである。実に美味しくて3杯半食べた。この頃のレコード破りである。お汁は白味噌、これまた美味2杯、非常なものである。それから新菊のごま合ひ、これもまたすてき。実に食べるもの悉くみになる様な気がした。入浴、目方が増していた。

夜の星は実に実に美しかった。もの干の上で暫し天を仰いだ。金星の炯々たる光が西天に輝いていた。すべて感謝のみで満ちた。

まず身体の強健である。それ心の平安と信仰より生まるである。神よ、益々よき信仰の戦をたたかわしめ給え。よき実を結ばしめ給え。我思い煩わじ。すべて神にゆだねまつりて、信頼によるその日暮らしをなさん。なさしめ給え。栄光神に在らしめ給え。アーメン。

○1924年5月26日 (月)

吉原叔母様来らる。

○1924年5月27日 (火)

武田へ行く。槍投げをする。

○1924年5月28日 (水)

散歩をする。内堀半蔵門のあたりへ。まことによし。

○1924年5月29日 (木)

武田へ行く。

○1924年5月30日 (金)

晴。氣候温暖、やや夏めいてきた。春も終りを告げんとしている。庭の青桐の葉が、はや蔭を宿す様になった。人の成長もかくの如しである。庭の青桐が今青春期にある。僕もまた然りである。彼の生々たる青色の如く僕の心も生々澁刺たるものであらねばならぬ。神経衰弱だの、信仰衰弱だの、胃腸アトニーだのは最早我に何のかわりあらんや、と云



う様にやらねばならぬ。

かりそめなるあやまちもほろびに入る門ぞかし。よくよく心に銘すべきである。
ルーテルの額をかけた。(聖書の研究より)

汝、先ず神の国と義とを求めよ。

よわきものよ われにすべて

まかせよやと 主はのたまふ。

主によりて あがなはる

わが身のさちは みな主にあり。

○1924年5月31日(土)

晴。午前7時、起床。南先生のお宅へ参上、診察して戴いた。大層よくなったと言われ
て嬉しかった。11時頃、帰宅。

昼食後、早稲田なる三浦さんのところへ無線電話を見に行つた。蓄音機をしているのが
よく聞こえた。電気の力の偉大なるには驚かざるを得ない。今日は山本の兄上の誕生日で
ある。僕の身体を見舞に来て下さつた。

夕飯は鞘豌豆の御飯、美味しくて4杯も食べた。この頃、澱粉質のものが非常に美味しい。
太る前兆と喜んでいる。ただ過食を注意し飽くまでも節食主義を守らねばならぬ。節食主
義は誠に我が肉体の保健に最善の方法である。宇都宮の兄上が帰られた。

